

☆自宅での生活 どう支える 医療的ケアが必要な子と家族 九州・沖縄の保育士らが研修会

2017/11/23 付 西日本新聞朝刊

https://www.nishinippon.co.jp/feature/listening_library/article/375365/

> ●社会資源や制度 道半ばだが

たんの吸引や管を使った栄養注入（経管栄養）など医療的なケア（医ケア）が必要な乳幼児が病院から自宅に帰る際、家族も含めてどう支えるか。日本医療保育学会九州・沖縄ブロックの研修会が19日、福岡市内であり、小児医療に携わる保育士や看護師、理学療法士ら約50人が意見交換した。医療の進歩により自宅で暮らす重い障害児らが増え、その支援が始まって約10年。在宅生活をサポートする医療や福祉などの社会資源は十分ではない。保育を含めた関係機関の連携が不可欠であることが、あらためて浮き彫りとなった。

▼「利用せず」6割

在宅の障害児が多くなったのは低出生体重児の救命率が改善し、新生児集中治療室（NICU）の長期入院が増えたためだ。常態化する満床状態を解消するため、厚生労働省は2006年、退院後の子どもや家族に対する地域の支援体制整備など在宅支援に乗り出した。福岡市立こども病院の病棟保育士、南里恭子さんによると「医ケアが必要な子どもの在宅医療が積極的になされるようになったのもこの頃」とみられる。

同省の調査によるとNICU退院児の6割以上が吸引や経管栄養を必要とし、約2割が人工呼吸器管理など特に高度な医療が必要。自宅で医ケアを一手に引き受けているのは特に母親で、負担感が「ある」と答えた介護者が約8割に上る。ただし医ケア児の約6割が「障害福祉サービスを利用していない」と回答している。24時間介護に携わる在宅生活を支えるには、こうした子どもを一時的に預かる施設も不可欠だが「限りなく少ない」（南里さん）のも一因とみられる。南里さんは「家族をサポートする体制が少しずつ充実していったほしい」と訴えた。

▼家族も健康不安

病院から自宅に移行する家族の支えになるのが相談支援専門員。子どもや家族が自宅で元気に暮らせるよう、家族の生活スタイルに合わせてヘルパーや訪問看護などさまざまなサービスを「つなぐ」役割を果たす。同市立心身障がい福祉センターの加納洋子さんもその一人。各事業所の担当者が家族も交えて会合を持ち、利用するサービスを調整する仕組みは15年度から本格化した。専門員が実際に相談支援に関わるのは「退院するちょっと前が多い」のが現状という。

家族によってはわが子の障害を受容するのに時間がかかったり、本人に代わって気管切開に踏み切るかなどの決断を迫られたりするなど、入院中から精神的な負担を抱える。加納さんは「専門員も、入院時のもっと早い段階から支援にかかわることが望ましい」と、医療と福祉の連携のあり方について語った。

九州大大学院医学研究院准教授の濱田裕子さんは「専業主婦の場合は在宅生活の中で健康診断にも行けず、病気になっていることもある」と指摘。在宅生活を維持していくには「看護師や保健師、医療関係者は子どもの健康だけでなく、家族の健康も視野に入れる必要がある」と強調した。

▼発達支援も重視

昨年法の改正により、医ケアが必要な子どもが適切な支援を受けられるよう、医療、福祉、教育などの連携促進が自治体の努力義務となった。これに絡み、会場からは「医療側はどうしても子ど

もの命や医ケアをどうするか、ということが先行しがち。遊びや発達支援の視点が後回しでは」(同市東区の療育施設の保育士)と問題提起も。加納さんは「その子が何が楽しいか、どれが楽な姿勢か、笑顔で過ごせることが免疫力を高める作用もあるだろうし、親子関係がそれでスムーズになれば支える家族の励みにもなる」と応じ、保育や療育との連携も重要との認識を示した。

「家族頼み」からの脱却は道半ばだが、支援の輪は確実に広がりつつあるといえそうだ。…などと伝えています。

△日本医療保育学会(医療保育・病児保育の学会)

<http://www.iryohoiku.jp/>

<画像は、西日本新聞記事より>



☆医療的ケア児 支えよう 小倉北で研修会 医師や事業者ら250人／福岡

毎日新聞 2017年11月20日 地方版〔北九州版〕

<https://mainichi.jp/articles/20171120/ddl/k40/040/342000c>

> 人工呼吸や胃ろうなど日常的な医療が必要な「医療的ケア児」と呼ばれる子供と家族を支えるための「小児等在宅医療多職種研修会」が、小倉北区馬借のホールであった。県と市総合療育センターの主催で医師や看護師、在宅支援サービスの事業者ら約250人が参加した。

研修会は講演とシンポジウムの2部構成。「在宅生活を支えるレスパイトケア」と題したシンポジウムでは、訪問診療専門医院「コールメディカルクリニック福岡」（宗像市）の岩野歩院長らが活動報告した。

岩野院長は、医院と併営の重症心身児デイケア「小さなあしあと」の受け入れ状況を説明。予約していた子が突然の発熱などで当日キャンセルするケースも多く、運営には難しさが伴うが「預かる子供が何人でも柔軟に対応できる人員配置をしている。スタッフは厳しい環境にある子供らと関わることで地域貢献を体感している」と述べた。

会場からは「小児を診てもらえる在宅医が少ない」「自治体の補助金など地域間で支援に差がある。子供が少ない田舎では受け入れ事業は難しい」といった意見の他、災害時の対応を尋ねる質問もあった。

…などと伝えています。

△コールメディカルクリニック福岡

<http://www.call-med-fuk.com/>

*小さなあしあと <http://www.call-med-fuk.com/footmark>

△福岡県小児等在宅医療推進事業について

福岡県 高齢者地域包括ケア推進課 在宅医療係 2017年6月20日

<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/syonizaitaku.html>